

### アグアスカリエンテス会議

1914年10月10日、アグアスカリエンテス代表者会議と呼ばれる最初の会議が市最大の集会所モレロス劇場で開催された。この会議は知識人や政治団体ではなく軍人の会議であった。革命軍指揮官の中には代理人を送り込んだ者もあった。全部で五十七人のジェネラルと知事、九十五人の代理人、殆どが佐官、尉官で兵卒はいなく、選挙で選ばれた者もいなかった。其々のジェネラルはスタッフと護衛を連れていた。ある者は数少ないすし詰めのホテル、ある者は保身を考えた資産家の家に、ある者は窓をカーテンで飾ったベッド付きの列車に妻や女を連れて乗り込んだ。<sup>14</sup>

アグアスカリエンテス会議には大きく分けて三つの派閥があった。最も結束力があつたのはピヤ派、最初に参加した150名中僅か39名と少数であった。兵数千にたいして一名を送り込んでいれば、半数近くまで達していたはずであった。ピヤ自身は参加せず代理人を送り、会議における決定の如何に関わらず、それに従うとするメッセージを送った。ピヤが欲したのは軍事、政治的な現状維持、つまり北部師団への権限と、チワワとその周辺に対する政治的統治権の保持であった。ピヤは過半数のカランサ支持者がカランサを犠牲にすると確信していた。カランサを退けることが最も重要で、大統領候補は北東及び北西師団の何れからでも受け入れることを全員一致で了承していた。ピヤ派が掲げた残り二つの要求は、エミリアノ・サパタ解放軍の会議参加と農業改革で、これらは容易に賛同を得ることが出来るとピヤは考えていた。<sup>15</sup>

会議の二日目アルバロ・オブregonの発案で、如何なる犠牲を求められる結果となろうとも、参加者一同が会議の決定に服従することを誓って、メキシコ国旗に署名した。その二日後、ピヤがやって来て感動的な儀式を執り行ない、自ら国旗に署名し、会議の決定に従うことを誓った。<sup>16</sup>

二つ目は北東軍団で、参加者の其々がカランサと強い繋がりがあつた。殆ど戦果を挙げていなかったにもかかわらず、政治的には重要なポストを占めていた。パブロ・ゴンザレスを中心としたこのグループは、農民は一人もいなく、皆都市生活者で様々な経歴の持ち主であった。パブロ・ゴンザレス、フランシスコ・コス、マヌエル・ディエゲスはPLMの活動家で、ディエゲスはカナネア銅山のストライキの指導者であった。熱烈なカランサ信奉者が多く、メキシコの遅れた地域において改革を実行するには、中央にカランサのような強力なリーダーが必要であり、アメリカに対抗してメキシコ領土保全をするのはカランサ以外にいないと信じていた。<sup>17</sup>

第三のグループは平和評議会を中心とするグループで、主としてソノラ出身の北西師団のメンバーと、主要革命グループ以外の独立した革命家で構成されていた。アントニオ・ピヤリアルやエドゥアルド・アイは臨時大統領候補に名乗り出ていた。カランサは保守的な政権を樹立するであろうし、ピヤは独裁者となるとして両者を国政の場から外すのが彼らの共通した目的であった。サパタ派が参加するまではこのグループが討議の主役で、以

前急進的なPLMのメンバーであったアントニオ・ビヤリアルが基本方針演説を行い、参会者から殆ど満場一致に近い賛同を得ていた。ビヤリアルは同胞同士の無意味な殺戮は膨大な数の犠牲者を生むばかりか、革命軍が一致団結しない限りベラクルースからアメリカ軍を追い出す事は出来ないと呼びかけた。加えて、これまでに行ってきた富者からの財産徴用については秩序だて行われず、市民に還元されていないことを反省し、今後は戦争による負債に充当し、我が国の経済を立て直すために、秩序を保ち、賢明に執り行う必要があると述べるに止まる、曖昧なものであった。泥棒呼ばわりされ、腐敗していると非難されたジェネラルは誰もいなかった。カランサはこのような徴用は硬く禁じていた。ビヤリアルは、借金を抱え農園主のために働くペオンや、飢餓的低賃金で働く工場労働者が無ならない限り、革命が成就したとは言えないことを明確に強調する一方で、農業改革に関しては具体的には何も示さず、単にサパタ派と協力し土地分配を行い、農民の幸せを勝ち取ると述べただけであった。それと対照的にビヤとカランサへの攻撃は明快を極め、革命は一個人が新国家の大統領に就任するためではなく、飢餓追放が目的であると明言し、指導者選びより、革命の原理を全うすることが重要であると訴えた。国家の繁栄と自由を守るためであれば、全ての指導者たちが命を落としても良いと言えだけの勇気を持つと、と演説を締めくくった。<sup>18</sup>

ビヤ派のジェネラルの中にはビヤに反対し、何時でも離反することを既にオブレゴンに告げているものがあつたが、会議ではビヤ派に同調していた。カランサ派の中で最も忠実とされていたパブロ・ゴンザレスでさえも、もしビヤが退いたら最高指揮官に反対することも考えていた。第三のグループの結末は強くなく、ビヤとカランサの両者が共に会議の決定に従わない場合には、二つに分裂することが十分に考えられた。<sup>19</sup>

サパタ派を会議に入れることを最優先課題としていたアンヘレスは、モレロスへ出向いてサパタ派の参加を促すための使節として、議会から任命を受けることに成功した。アンヘレスは農民指導者カリスト・コントゥレラスを含む三人の従員を伴ってクエルナバカへ向かった。サパタは丁重に使節を迎え、そして戸惑った。過去マデロとオロスコに同調し、惨憺たる結果を経験していたサパタは、外部の革命運動に組み入れられることに不安を抱いていた。しかしカランサが勝利すると、マデロより更に残虐な仕打ちを受けると予想した彼は、カランサを叩くのはビヤしかいないと、1913年11月以来、計画的にビヤと親善関係を結び、カランサからビヤを離反させようとしていた。もしここでビヤが送ったアンヘレスの仲介で会議に参加しなければ、両者の同盟は達成できないと考え直したサパタは、彼の軍事補佐官と相談した結果、二十六名の代表者を送ることにした。代表には軍事指導者は一人も含まれず、皆民間人であった。サパタ派の代表格パウリノ・マルティネス一行は先ずビヤの総司令部を訪問し、何らかの協定を結んだ後に会場に臨んだ。会議の主目的は先ずビヤ派との連携の強化、会議がアヤラ計画を承認すること、そしてカランサを外し、かれらが敵ではないと認める人物に交代させることであつた。<sup>20</sup>

マルティネスは冒頭、北部革命軍の中で正真正銘の革命軍はビヤ派だけであることを強調した。サパタ派はアンヘレスとビヤ派の協力を得て、自分たちが標榜するアヤラ計画の採択を求めた。彼らはメキシコで過去例のない抜本的な土地分配計画を披露した。これにより各師団の間の基本的な関係は一変することになった。オブレゴンと彼の支持者も、根っからのカランサ支持者たちも、挙ってこれに賛同した。アヤラ計画に反対する機運にはならず、皆が農地改革者のお墨付きを求めた。しかし、それまでのメキシコの歴史に於いて計画や憲法に織り込まれた改革で実行されたのはほんの僅かにしか過ぎず、アヤラ計画の採択に特段の意味があるわけではなかった。<sup>21</sup>

カランサはビヤとサパタが辞任すれば自分も辞任を検討するという手紙を会議に送ってきた。カランサははっきりと辞めると言わなかった。決議案を容易に受け入れると予想していた参加者は、それが幻想でしかなかったことを知った。10月31日、権力を握ることにしか興味のないオブレゴンの主導で提出されたカランサとビヤの辞任を求める決議案が絶対多数で承認された。この裁決は辞めるとは言っていないカランサからの手紙に追い討ちをかけるように行われた。オブレゴンはビヤとカランサが同時に辞任することがメキシコに平和と和解をもたらすと曇り掛けた。オブレゴンはサパタの辞任は求めなかった。ビヤの代理人ロケ・ゴンザレス・ガルサ以外のビヤ派と北西師団派が賛成し、熱烈なカランサ信奉者が反対して決議案は採択された。オブレゴンはエウラリオ・グティエレスを臨時大統領に任命した。グティエレスはカランサと関係のある小さなグループの指導者で、オブレゴンが指名するまでは誰も大統領に成るとは思っていなかった。彼はサン・ルイス・ポトシ周辺で小さなゲリラ部隊を指揮していて殆ど無名であった。<sup>22</sup>

アンヘレスがビヤからのメッセージを読み上げた。ビヤは辞任を公式に表明し、更に会議は自分とカランサを撃ち殺すべきであると付け加え、満場割れんばかりの喝采を受けた。カランサは対照的に態度をあいまいにした。メキシコ市はカランサの軍隊で占領されていた。しかし、現実には指揮官のルシオ・ブランコは三番目の派閥に属するリーダーで、会議に忠誠を誓っていた。

11月1日、カランサはテオティウアカンへ遠足に出かける名目で、彼に最も忠実なジェネラルの一人フランシスコ・コスが支配しているプエブラ州へ逃げた。カランサはビヤが辞任した事は疑わしいとし、自分はパブロ・ゴンザレスに引き渡すので、ビヤはエウラリオ・グティエレスに北部師団を渡すことを要求した。ゴンザレスは忠実なカランサ支持者であり、グティエレスも同様カランサに近かったため、カランサはビヤがこの条件を受けないと予測していた。こうして数日間カランサはオブレゴンが議会から送った代表者の受け入れを拒み続け、ついに議会の権限を認めない、と回答した。この時点でカランサ支持者たちは最高司令官に従うことを表明して会議を離脱した。

猶予期間が過ぎた11月10日、グティエレスは、カランサを真の革命軍に対する謀反人であると宣言し、ビヤを革命議会軍の最高司令官に任命した。こうしてメキシコ革命で

最も壮烈な戦争が新たに始まることになった。23

ビヤは本当に辞める気があったのだろうか。無敵といわれた北部師団はビヤのカリスマ的人柄と圧倒的な人気で一つに纏まっていた。彼がいなくなれば北部師団は崩壊していた。カランサの主力であったパブロ・ゴンザレスとアルバロ・オブレゴンが司令官として残れば、当然オブレゴンが最強となる。一方でビヤは兵を集め、武器の密輸を行い、戦争の準備をしていた事実が認められていた。ビヤが辞めようとしていたとは考えられなかった。恐らく両者は、今辞めてしまえば革命は成就できないと感じていて、辞める意思は全くなかったと思われる。

カランサは自らを、シヴィリアン・コントロールへの最後の防波堤であると考え、もしビヤとサパタが勝利すればメキシコは無政府状態となり、国力は更に衰退し、アメリカのお慈悲にすぎると残された道は無くなると信じていた。ビヤの目にはカランサは独裁者で、チワワとドゥランゴで忠誠を尽くした北部師団の兵士、将校、ジェネラルの怒りを宥めるため、ビヤが行った農地改革を全て元に戻すであろうとビヤは予測した。

どちらに分裂の責任があるかを考えるときに忘れてはならない事は、カランサは全国制覇を目指し、ビヤやサパタが彼に従うことを要求していたのに対し、ビヤは逆に国家的権限を求めていたのではなく、彼の部下それぞれの派閥が、其々の地域をコントロールできるようにする現状維持であったことである。24

ビヤとカランサの両者が分裂したことで、両方の指導者から力を受け継ごうとしたオブレゴンの望みは絶たれた。しかし挫折は一時的で、彼は一年もせずにビヤを倒し、五年以内にはカランサを権力の座から追い出して大統領になる。オブレゴンは会議の後、マヌエル・ディエグスと秘密裏に連絡を交わし、過激な策に出た。ディエグスは名目上オブレゴンの部下であり、北西軍団で最強の分遣隊をハリスコ州に結集させていた。オブレゴンは自分に従う者を全てハリスコに集め、カランサとビヤの何れか辞めない方へ攻撃を加えようとした。オブレゴンは以前密約を交わしたことのある北部師団の反ビヤ派を取り込もうとしていた。更に戦力の弱いパブロ・ゴンザレスの北東師団は、カランサのために危険を犯してまで軍事行動には出ないであろうと彼は予測した。

しかし、オブレゴンは自分の力と指揮官の忠誠心を過大評価していた。そのようなことも有ろうかと考えたカランサは北西師団を無数の分遣隊に分断して、ソノラからメキシコ市まで数百キロに渡って分散させていた。オブレゴンの指揮官、ハリスコのディエグス、ソノラのカイェスもイルもオブレゴンに同調せず、カランサに忠誠を尽くした。オブレゴンにはビヤに加わるか、あるいは最高司令官に忠誠を尽くすかの、二つの道しか残されていなかった。オブレゴンは迷わず、カランサの支配するケレタロに向かった。カランサは丸二日間も面会を拒み、彼がはっきりと最高司令官のもとに入る決心が付くまで待たせた。

オブレゴンが最高指揮官の元に加わる決心をしたのには三つの理由がある。第一、彼は中産階級の出身で、ピヤやサパタの農民階級よりは、カランサのようなブルジョワ階層のほうが組み易かった。第二はチワワで受けた仕打ちでピヤを憎んでいた。最後に、もしピヤに加わっていたら、彼の指揮官は誰もオブレゴンに追随しなかったことであつた。更に自分の出身地からの支持を得られない限り、力を得る事は出来なかつた。カランサはこれ等オブレゴンのジレンマを十二分に理解していた。このオブレゴンの選択により、カランサは再び信頼できる最も才能のある指揮官を取り戻した。これがカランサ派勝利の決定的な要因となつた。 26

14. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1998, P375

15. Ibid. P376

16. Ibid. P377

17. Ibid. P378

18. Ibid. P380

19. Ibid. P380

20. Ibid. P382

21. Ibid. P383

22. Ibid. P384

23. Ibid. P385

24. Ibid. P386

25. Ibid. P387

26. Ibid. P388